

## 退職者のひとこと

### 研究所入所の頃

私は1974年4月1日に奈文研に入所したのですが、同時期に採用されたのが、百橋明穂・岩本正二・川越俊一各氏と東北大学から転任した須藤隆氏でした。私の勤務場所は平城宮跡発掘調査部考古第3調査室で、室長は森郁夫氏、室員は岡本東三・金子裕之・須藤隆の各氏でした。この年の4月から埋蔵文化財センターが設置され、1975年の3月からは飛鳥資料館が開館するという、奈文研の組織が最も拡大しているときでした。この考古第3調査室は瓦の調査室なのに、1974年の3月末まで岩本圭輔氏、4月11日まで松沢亜生氏が室員でいたため、4月初頭の段階では、松沢氏が作った石器が考古第3の部屋中に積まれて置いてあり、また岩本氏も時々顔をだしては、細石刃などを作っており、旧石器研究室のような外観を呈していました。私は卒論・修論とも旧石器をテーマにしていたので、直ちに松沢氏に弟子入りした格好となり、瓦の部屋の新人としてはダメな人間として出発した訳です。この時、瓦部屋の森郁夫氏は室長として最も気合いの入った時期であり、瓦部屋の研究会を主催し、毎回のごとく自説を発表していました。この情熱が、岡本・金子・須藤そして松沢氏までも、何らかの形で瓦の論文を書かせる原因となったものと考えられます。

奈文研での1年目の発掘は薬師寺西僧坊でおこないましたが、私が瓦を調べようと思ったのは、西僧坊間仕切り使用瓦が平安時代の復古瓦ではないかと思い、平安時代の瓦を編年しようと考えたことがきっかけです。この復古瓦という発想は、西僧坊の発掘中に、私が発掘現場から瓦の部屋に帰ると、こんな、いい瓦が出土しているといって、森郁夫氏が瓦部屋で食べ物を用意して待っていてくれたことがきっかけでした。本薬師寺から運ばれた完形の軒瓦です。2日後、私は発掘中に完形の瓦を見て、あっ、古い、いい瓦だ！と言ったのですが、発掘担当室長の岡田英男氏は、これは、明治の修理瓦と、ひとめ見ただけで言い当てました。泥を取ると、たしかに明治三十三年森田仙助と印が押してあるのです。自分の眼力の無さを恥じました。奈文研で第2の師匠に出会ったのです。 (副所長 山崎 信二)

### 奈文研30年

1976年入所以来、途中、奈良市にいた3年間を除けば、ちょうど30年ということになる。その間、平城、藤原、飛鳥資料館、埋文センター、企画調整の各部署を経験させていただいたのであるが、「それぞれ、いついたの」と尋ねられると、自分のことながら、あやふやな答えしかできない。人間の記憶というものは、なんといい加減なものなのか、それとも個人的な問題なのであろうか。

